

平成 16 年 7 月度 岡山民俗学会例会発表 補筆  
ハンセン病と 1440 年備前国西大寺勸進帳

丸谷憲二

## 1 はじめに

備前西大寺は寺院名が地名となっており、郷土史研究は寺院史研究にならざるをえない。私は備前西大寺の寺院史研究のための一番重要な史料が 1440 年の『備前国西大寺勸進帳』であると考えている。しかし、原文は和様漢文であり「仏教学と中国思想を修めた中世史の先生」でないと解読は難しいと言われている。しかし、仏教民俗の立場からこの難問に挑戦したい。キーワードは、ハンセン病患者「癩人」である。ハンセン病患者「癩人」について考察した。1440 年の備前西大寺はハンセン病に対して差別の無い仏国土であった。その根拠は、勸進帳に三回も「癩人」が登場し、お布施が集まり、庶民の合力により備前西大寺が再建されたという事実である。「一切の差別の無い仏国土」と言う根拠は、快尊(慎尊)と宥長の思想・哲学である「荘子の胡蝶の夢・万物斉同」、「仏陀の犀角経」の教えである。南都西大寺中興の祖、叡尊と忍性の悲華経の「見仏」の教えを基礎にした釈迦信仰・文殊信仰が快尊(慎尊)と宥長の思想・哲学となり受け継がれていたと報告したい。教えの伝承・アーガマである。私は備前西大寺には、釈迦の真実の仏教が生きていたと確信している。本文の最後に 1440 年『備前国西大寺勸進帳』(岡山県古文書集三・岡山県史編年史料)の全文を紹介している。

## 2 ハンセン病「癩人」の記述

勸進帳全体で三回も「癩人」という記述がある。勸進帳、寺院再建のためのお布施を集めるのに何故、「癩人」が三回も登場しなければならないのかが最大の謎である。三回の「癩人」の登場時の背景を確認したい。

- ① 沙門宥長に語りて曰く、・・・夜、夢に癩人、数輩来たりて云う。我はこれ、西大の使令なり。(または、西大の使いせしむるなり。)汝、我が殿宇を、瓦葺をもってすべきなり。某、せまりて曰く、鄙賤の身、非力の及ぶ所、即ち、孔方四百字(錢四百文)を授けると曰す。是をもって宥長法師に与えれば、すなわち成功すべきなり。
- ② ・・・夜、また夢に癩人来たりて、激しく怒りて曰く、汝、何ぞ命に違うか、と。某、戦慄(おののき)て諾(うべな)い、覚めてなご冷や汗、背をうるおす。この故に、あい施と。言いおわりて去る。
- ③ 殊に癩人現われれば、ああ、また怪しむべきなり。諸聖の方便、この格(のり)、もつとも多し。

以上三回の「癩人」登場の中でも、最大の謎が『西大寺の使者が何故、ハンセン病の患者「癩人」でなければならないのか』である。もっと重要なことは、「癩人」が三回も登場した勸進帳で何故お布施が集まり、備前西大寺が再建されたのかである。つまり、1440 年・室町時代の備前西大寺住民の仏教への帰依(信仰心)をどのように考えるかである。

## 3 願文内容の確認

備前西大寺中興の祖、宥長への児嶋小串浦文殊院快尊(慎尊)の願文「案」を確認したい。「降伏して願うは、上にては明主・重臣、中にては文武百官、下にては士農工商、豊儉、分に随いて、樂を施す。」である。この願文は、大乘仏教の根幹の理念を説明し実現への決意表明である。「上求菩提・下化衆生(上に向かっては菩提心を求め、下に対しては衆生を救済すること)」や、「自利利他円満(自分も他人も共に宗教的目的をとげること)」である。この願文内容は日本仏教史の中でも鎌倉仏教、大衆仏教の考え方である。鎌倉時代は

華開く新仏教といわれ日本仏教史上、仏教が最も繁栄した時代である。鎌倉新仏教は、国家仏教から個人救済を目的とする大衆仏教に変化した時代である。鎌倉仏教の中に、釈迦信仰、菩提心重視のグループがあった。栄西の臨済宗・道元の曹洞宗・日蓮の日蓮宗、そして南都の旧仏教の改革者達である

#### 4 南都仏教の改革者達

- ① 興福寺・法相宗・貞慶（1155-1213）釈迦信仰・悲華経・戒律復興
- ② 東大寺・華嚴宗・明恵高弁（1173-1232）釈迦信仰・悲華経重視
- ③ 西大寺・新義律宗・叡尊（1201-1290）釈迦・文殊信仰・悲華経重視・戒律復興
- ④ 西大寺・新義律宗・忍性（1217-1303）叡尊の弟子・釈迦・文殊信仰・悲華経重視・ハンセン病患者救済、橋梁・港湾工事、尼寺建立等

私は、南都西大寺・忍性の「ハンセン病患者救済活動」に注目した。室町時代の南都西大寺の新義律宗は南京律(なんきょうりつ)と呼ばれ、臨済宗と並んで、鎌倉・室町幕府に保護され、安定して成長していた。

#### 5 南都西大寺と備前西大寺

1440年備前国西大寺勸進帳の「西大の使令なり」または「西大の使いせしむるなり」は大安寺伽藍縁起流記資財帳の東大西大両大寺との記述からも「南都西大寺からの再建指令書」である。1440年・室町時代の備前西大寺は南都西大寺が直接支配する末寺であった。金陵山西大寺の一山を形成する普門坊円満院にて、1790年の寺社奉行所提出書類の写しである「真言律宗事」と言う古文書を発見した。鎌倉時代から室町時代までの備前西大寺は南都西大寺が直接支配する末寺であり、江戸時代においても交流があった。

#### 6 叡尊と忍性の釈迦信仰

私は石川県出身であり、岡山県へ転居した時から、浄土宗(1175年・法然)と浄土真宗(1224年・親鸞)の教学上の違いに注目してきた。それは、浄土宗と浄土真宗の相違点、つまり「一向一揆の仏典上の根拠は何か」である。浄土宗と浄土真宗との教学上の一番の違いが「親鸞の悲華経信仰」にあるという事実を知った。南都西大寺・新義律宗の叡尊と忍性の「ハンセン病患者救済活動」は周知の事実である。叡尊と忍性の釈迦信仰と戒律護持は仏教研究者の常識であり、南都西大寺仏教の基本である。鎌倉時代の釈迦信仰とは、釈迦の原点への復帰という運動である。

#### 7 法華経とハンセン病

法華経は中国、日本において古くから広く流布した経典である。仏典におけるハンセン病と言えば、天台宗・日蓮宗で基本経典とされる「妙法蓮華経・巻第七」が知られている。法華経の中でも最初期に説かれた部分である。法華経の注釈書は、インド仏教所産として現在のところ世親(ブアスバンドゥ)の著したもの一種しか残っていない。梵文原典は存在しない。六世紀初頭の二種の漢訳が残っているが同本別訳である。私は、一つの注釈書を確認したが法華経の研究者への注釈書であり、一般読者へは説明不足である。この説明不足が、ハンセン病支援団体からの仏教批判・法華経批判、「仏教者はハンセン病患者を差別している」という根拠となっている。しかし、江戸時代初期に短期間であるが、日蓮宗・身延山でハンセン病患者救済活動があった。

稲谷祐宣先生は、「仏教学は論議に始まり、論議に終わる」と教示される。論議とは、仏典の素読(そどく)と講義(講伝)が終了すると、二人に一つのテーマが与えられ一人は与えられたテーマが正しいことを主張し、一人は否定する立場となり互いに問答する。互いに力の限りを尽くし、最後には一方が答えることができなくなる。すると、問題を出した

先生がどちらが正しかったかの判定を下す。武家の真剣勝負に相当する。「妙法蓮華経・卷七」についての徹底した論議を聞きたい。

## 8 悲華経(ひげきょう)と穢土(えど)成仏

備前西大寺周辺の高野山真言宗寺院を回って現代における悲華経を調査した。仏典を所蔵している寺院は皆無であった。西大寺観音院は未調査である。仏教大事典(小学館)で悲華経を確認したい。悲蓮華経(ひれんげ)・大乘悲分陀利経(ふんだり) 十卷 成立 414～426年(大正蔵三卷 所収) 曇無讖(どんむせん) 訳

浄土に成仏せずに、この五濁悪世(ごじょく)に出世し成道(じょうどう)して衆生を救済した。穢土成仏の釈迦如来を、その諸仏より優れた無量の慈悲をたたえ、何ゆえ穢土に出世したか、その出世に関する往昔の因縁を、諸他の浄土成仏の如来(例えば阿弥陀如来)と対比させながら叙述した本縁経。六品よりなる。穢土(えど)とは、浄土の対。穢・穢域・穢国・穢悪国土(えわく)・穢刹(えせつ)・不浄土・けがれた不浄の国土のこと。煩惱にけがれ苦悩に満ちた我々の世界。現実世界。この世。衆生凡夫の流転輪廻(りんね)する迷いの世界である三界六道の総称。

## 9 悲華経における「見仏」

私は悲華経の「その人の前に現ずべし。その人我を見て、すなわち我が前にして心に歡喜を得ん。」に注目した。これは「仏を見奉る。見仏」と説明される。悟りを求めるものが仏に近づこうとするのは当然である。仏の方から衆生の前に現れるというのは悲華経以前の仏陀観とは明確に異なっている。仏を見奉るとは阿含以来、「仏を見るものは法を見る」のであり、「法を見るものは仏を見る」と説明される。「仏を見る」とは「仏陀を覚った」ことを意味し、「そのままで仏の国に生まれる」と解される。それは仏教者の目標である。「仏の方から衆生の前に現れ出る」という考え方は叡尊と忍性の文殊信仰の基礎になっている仏教観である。

## 10 叡尊と忍性の文殊信仰

鎌倉仏教における南都西大寺の叡尊と忍性の布教展開を確認したい。これは、叡尊と忍性の釈迦信仰・文殊信仰に基づいている。叡尊と忍性の文殊信仰は、乞食や癩者など、いわゆる非人救済に道を開くものであった。元亨釈書(1322年・虎関師錬)に、忍性の人となり象徴するエピソードが記録されている。それは癩病患者救済施設として大和の般若寺近くの北山宿に北山十八間戸(けんど)を建設した当時の逸話である。「忍性は、手足が不自由になって歩くことができなくなった北山の一人の癩者を、一日おきに背負って町に運び、乞食の日課をすごさせ、夕方には再度施設へ連れ帰り、乞食生活ができるようにした。これが休み無く数年間続けられたという。」叡尊と忍性の文殊信仰の基本的な考え方は、「非人達は単なる乞食や癩者などではなく、文殊菩薩がこの世に現れるにあたって変身した仮の姿である。たとえ、病に侵されて醜い顔かたちになっていようとも、また、乞食にいそしんでいたとしても、彼らの内には崇高な文殊菩薩の光が宿っている。」と考えた。これは、「悲華経」の「仏の方から衆生の前に現れ出る」の教えである。「悲華経」には「浄土成仏と穢土(えど)成仏(この世における成仏)」が説かれている。「この世において人々を救済する」という教えである。「この現実で苦悩する人々、癩者や乞食などの非人救済」である。「彼等への施物は文殊菩薩への供養である。」という信仰である。

備前西大寺にも「癩病患者救済施設」と推定される「般若坊石碑(岡山市西大寺中1-7-15)」が残されている。備前西大寺に住む私達にとって最も大切にしなければいけない重要な遺跡である。1907年(明治40年)の「癩予防に関する件」という法律制定、1929年(昭和4年)からの「無らい県運動」、1931年(昭和6年)の「癩予防法」というハンセン病患者の強制

隔離という国の誤った政策の中で、ハンセン病患者への差別意識が醸成され、現在では備前西大寺が世界へ誇れる施設跡が行政にも見放されている。史料は沼田頼輔の「金山の古今(明治14年・西大寺高等女学校発行)」のみである。現在は、ご近所三軒の人達が大切に維持管理している。

## 11 「胡蝶の夢」と「犀角経」

### 11.1 胡蝶の夢

備前国西大寺勧進帳の勧進帳としての一歩重要な思想哲学が「胡蝶の夢・万物斉同(ばんぶつせいどう)」という荘子の思想の根底をなす言葉である。勧進帳には、「それ、人間ごとく夢幻ならずは無し。莊周の胡蝶か、胡蝶の莊周か。もし然らば、鄙夫の夢、間然すべからずなり。」とある。「いつだったか、私(莊周)は自分が胡蝶となって飛んでいる夢を見た。美しく飛び回る胡蝶である。心ゆくまで楽しんでおり、自分が莊周であることを忘れていた。だがふと目が覚めると、紛れもなく自分は莊周であった。いったい莊周が胡蝶となった夢を見たのか、胡蝶が莊周となった夢を今見ているのか、私には分からない。」莊周と胡蝶と確かに区別があるはずである。(だが、その区別がつかないのは)実は、これが物化(万物の極まりない変化)と言うものなのだ。莊子は万物を本来無差別で斉しいものと捕らえる、万物斉同の立場に立っている。全てが斉しいのであるから、我と他者との間に区別などあろうはずがない。目の前に差別があるというように見えている現象は、実は「物化」の一様相にすぎないのである。

南都西大寺に叡尊の在世中に作られた「月輪蒔絵経箱」がある。762年(天平宝字6年)の「金光明最勝王経」十巻を納めたものである。蓋の裏側と内部に「乱舞する各種の蝶」が見事に描かれている。蝶は経箱の内部空間に飛びまわる。まさしく、これは叡尊の思想である「胡蝶の夢」そのものである。「胡蝶の夢」は、犀角経の教えそのものである。

### 11.2 犀角経

備前国西大寺勧進帳の勧進帳における「犀角」の意味を南都西大寺中興の祖、叡尊と忍性の釈迦信仰と捕らえている。叡尊の釈迦信仰を確認しておきたい。① 京都・嵯峨の清涼寺の本尊(インドで釈迦の在世中に制作との伝承あり)を模刻することを発願。② 釈迦の原点に帰って、仏教の本質を認識し、西大寺における戒律復興運動のシンボルにしようとした。③ 志を同じくするものが結縁して合力で事業を成し遂げる、これを西大寺流と称する。④ 悲華経信仰

勧進帳には「上人は、まさに備の西大堂の基を改めるべし。ゆえにこの地の耳を持ち来り、即ち、堂を今の地に移す。児嶋南浦、稚戸の海中より、犀角を得、これを埋める。けだし、竜識に随うなり。因って犀戴と号す。或いは曰く、今、云う西大は、隱岐院御製の筆のみに改める」とある。

「児嶋南浦稚戸の海中より」は児嶋小串浦にあった文殊院の窓から見える風景の描写である。「或いは曰く、今、云う西大は、隱岐院御製の筆のみに改める」は、勧進帳としての権威付け誇張部分である。隱岐院とは、1221年の承久の乱により隱岐島に配流になった後鳥羽上皇(1180~1239年)である。この犀角の部分について考察したい。最古の仏典スッタニパータにおける犀角を意味していると考えられる。

### 11.3 スッタニパータ

スッタニパータは、教典としては最も古く、ブッダの肉声を伝えていた部分が多い。ブッダの逝去後(西暦紀元前383年)、弟子達はその教えの内容を暗唱の便を図るため簡潔な形でまとめ、あるいは韻文の形で表現した。ある時期にそれがパーリ語に書き換えられた。スッタニパータのうち、詩はアショーカ王以前(西暦紀元前268年より古い)、散文

は西暦紀元前 250-150 年頃の成立である。後に大乘教典として広くアジア各国に伝えられる教えが、素朴な具体的な形で述べられている。仏教の開祖であるゴータマ・ブッダ（釈尊）を歴史的人物として把握するとき、その生き生きとした姿に最も近く迫りうる書一少なくともその中の一つは『スッタニパータ』であるといっても過言ではない。

### 11.3 仏典における犀角「経」

仏典における犀角とは、「**最古の経典スッタニパータ**」を意味している。現存する経典中、最古のお経の中に、四十一の詩句からなる「犀の角」と呼ばれる項があり、「犀角と言えはスッタニパータ」と返ってくるほど、仏教研究者には知られた仏典である。歴史的人物としてのゴータマ・ブッダの教えに最も近いものが、スッタニパータである。スッタニパータとは、「**経の集成**」という意味である。その教えは簡単素朴な最初期の仏教であり、主として出家修行者のためのものである。

**犀角とは「独り歩む修行者」**を意味する。「犀の角」の比喻によって「独り歩む修行者」「**独り覚った人**」の心境、生活を述べている。「**仏典は比喻**」であり「**比喻の意味の解釈**」が重要である。しかし、「**比喻はあくまでも方便**」であって**真実そのもの**では無い。「犀の角のごとく」というのは、犀の角が一つしかないように、求道者は、他の人からの毀誉褒貶にわずらわされることなく、ただ独りでも、自分の確信にしたがって、暮らすようにせよ」の意である。勸進帳とは、お布施を集めるために寺から外部へ出す文書であり、1440年の勸進帳が観音院に残っていたということは、縁起(行方不明)と同時に寄進された勸進帳「案」であると考えられる。この勸進帳「案」は、児嶋小串浦文殊院快尊(慎尊)から備前西大寺の復興に努力している宥長への励ましの手紙であると考えられる。当時の自分達の置かれている状態を、「犀の角と言う言葉に託した」ものである。荘子の「胡蝶の夢・万物斉同」の「人間社会の尺度にとらわれなくて、自然にまかせて自由に生きよ。」という教えは「**仏陀の犀角経**」の教えそのものである。一番重要な事は、「**勸進帳として創作**」されたという事実である。

### 11.5 因号犀戴

1440年の僧侶は仏典ばかりではなく、広く内外の典籍を学んでいた。まず最初に「犀戴寺」の初見を確認したい。「犀戴寺」の初見は1496年の縁起である。この縁起は臨濟宗の高僧・天隱竜沢が書いている。「或曰犀戴寺」である。私は天隱竜沢に書いていただいた縁起であると考えられる。江戸時代の文献以降は、この縁起により古号・犀戴寺と書かれている。「**因号犀戴**」について解説したい。「**因号犀戴**」を書き下すと「**因(よ)って犀戴と号す**」となる。私は「**因と号**」と言う言葉の持つ意味が重要であると考えられる。「よる」という言葉の記述に、何故「**因る**」を使用したのか。一般には、「**拠る・依る・由る**」を使用する。「**因**」と言う字には、仏教学上の特別の意味が込められている。

法相宗の瑜伽師地論の中の五明(仏教的な学問分類法による五つの科目)の中に因明(いんみょう・論理学)がある。つまり、「**因**」と言う字により、因明において論証の根拠を述べている。(論理学の媒概念)この縁起には、多くの中国典籍が引用されている。中国では「**号**」と言う字に、特別の意味が込められている。昔の中国では、本名や字(あざな)の他に号(ペンネーム)を付けた。「**因号犀戴**」との記述は、「**宥長**」と「**快尊(慎尊)**」との間の深い教養に裏付けられた西大寺の「**字音仮名遣い**」であり「**遊び心**」と考える。つまり、「**因号犀戴**」とは、原始仏典として知られている、『阿含経』の小部(クッダカ・ニカーヤ)の経典『スッタニパータ(経の集成)』の中の、四十一の詩句からなる「犀の角」と呼ばれる佛典の実践によって再建された寺院である。「**犀戴寺**」とは「**犀角の教えの実践**」と言う仏教学の教えを冠した寺院となる。現代風に言うならば、西大寺のニックネームである。ニックネームが定着したということは、1440年~1496年の間に「**宥長**」の素晴

らしい働きがあったことがわかる。

## 11.6 随竜讖の分析

辞書で一字ずつの解説を試みた。①「随」周易の六十四卦の一つ、②「竜」星の名、木星、③「讖」未来記、予言書、④「木星」七曜の一つ⑤「木」五行の一つ・その首位にあたり、生育の徳がある。つまり全ての語が易学を意味している。密教占星術として知られる宿曜経が西大寺観音院蔵書にある。宿曜経の正式名は文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善悪宿曜経(モンジュシリボサツ・オヨビ・ショセン・ショセツ・キッキョウ・ジジツ・ゼンアク、スクヨウキョウ)である。宿曜経は、易経と合わせて占わねばならない。宿曜経の中の「七曜」に「木星」があり、「木星」は繁栄と寛容を司る、別名「歳星」である。易経は六十四卦、三百八十四爻の陰陽の道理を示し、文王は六十四卦の夫々に象辞を掲げ、周公は三百八十四爻に象辞を掲げている。易経の解釈書は上象伝、下象伝、上象伝、下象伝、繫辞上傳、繫辞下伝、文言伝、説卦伝、序卦伝、雑卦伝があり、何れも孔子の作であり、易の十伝、十翼と云われる。伏羲・文王・周公・孔子が易の四聖と言われる。

## 11.7 随竜讖の解析

「竜」は架空の動物であるが、易経では動物の象徴とされる。「竜」は、六十四卦の「乾為天」の首座である。象伝の辞、そして爻辞のほとんどは竜の動きにたとえて説かれる。古聖の見解の一例を紹介すると、「竜」とは『乾の卦』を意味している。「元亨利貞」である。「はじめてとおる。よろしくてただし」である。「乾(けん)は元(おお)いに亨(とお)る、貞(ただ)しきに利(り)あり」と解される。占断は次のようになる。「問う人の希望はおおいに通るであろう。しかし、問う人の動機が正しくて、正しさが持続されることを持って条件とする。」この持続が大切であり、動機が正しくても正しさが持続されなければ終わりが全うされない。重要なのは「随」の意味である。「随」も、易経の言葉である。「随」は「万事順調にゆき、占問したことには利がある。災難を免れる」つまり、易経では条件付で「したがう」の意となる。

「蓋随竜讖也」を書き下すと、「けだし、竜讖に随うなり」となるが、これは別の可能性として、「けだし、随竜讖なり」とも読める。「竜讖」にしても「随竜讖」にしても、ひとつの独立した用語である。厳密には「周易」に代表される易学と、木星=歳星の「九星学」と、讖の「讖緯学」とは別物である。宿曜経はもともとインド占星術系の書であるが、中国にもたらされて解釈された時点で、九星学などの中国占星術的な解釈を加味されてしまっている。宿曜経を使用する場合は、経典そのものと、中国人(唐代以後)による経典の解説書、それと中国伝統の九星学を別個に調べる必要がある。宿曜経が空海によって伝来されて以後は、日本神道的な解釈も加味されており解析は厄介である。これは中国や日本に限った話ではなく、ヨーロッパにおいても似たようなことをやっており、思想的・宗教的というよりも、むしろ歴史的な過程の一つとして考える。そういう歴史的な制約の中での勸進帳(案)であり、快尊(慎尊)と宥長の思想である。純粹思想としての仏教学や中国思想だけでは、まず妥当な解釈は難しい。そして思い至ったのは、この「竜讖」は「随竜讖」ではなく、一つの用語としての「竜讖」に「随う」と解釈するのが妥当ではないかである。

## 11.8 随竜讖の解説

随竜讖についての解説を報告したい。この三文字に注目してから、すでに十三年が経過している。すでに指摘したように「宥長と快尊の思想」としては、「胡蝶の夢」と言う荘子の「万物斉同の境地を著す成語」が使用されている。これは、荘子の思想の根底をなす考え方の一つである。この勸進帳(案)には、細かく見ていけば、多くの中国典籍が引用さ

れている。1440年当時の僧侶が、仏典ばかりではなく、広く内外の典籍を学んでいたことがわかる。まず注目すべきは、「随竜讖」と「三字名の緯書名」がついていることである。極めて難解な呼称であり、一見したところその難解さが、いかにも預言書としての神秘性を感じさせる。緯書集成での最終確認はしていないが緯書名の形式を採用して「預言書としての重み」を表現していると考ええる。「蓋随竜讖也」とは、「私の占いに従って行動すれば、必ず備前西大寺の再建は可能である」との強いメッセージを意味している。

緯書とは、漢代儒教経典の一種である。本来の経典を経書と言うが、それに対して緯書と名づけられた。後漢書では主に図讖(としん)と呼ばれる。経(縦糸)と緯(横糸)という関係からもわかるように、孔子の教えを別の視点からまとめたものである。しかし、成立において中国固有の宗教が混じったため 予言書的な性格を持った。そのため、内容的に儒教経典としての緯(い)の部分と占いや未来予言に関する讖(しん)の部分が混在している。善珠(723~797年)の因明論疏明燈抄(781年)に緯書が引用され、当時から仏典解釈に用いられていたことがわかる。

貴方(宥長)に備前西大寺の再興ができるかを、宿曜経と易经で占いました最高の卦が出ました。六十四卦の最上位の『乾(いぬい)の卦』がでました。「何事も希望通りになり、正しさが持続されれば、結果全てよし」という最高の卦が出ました。しかし、この卦も、全て安心していただけるわけではありません。この卦を構成する六つの陽爻の中、最上位に位する上九の爻辞は、次のように言っています。「亢竜(こうりゅう)、悔あり」と、つまり、登りつめた竜は必ず後悔すると説明されています。「登りつめた竜は、降りようにも降りられず、落ちる以外に道は無い。」つまり、過度の慢心を戒めております。「荘子の万物斉同」の教え、「釈迦の犀角経」の教え、「占問の結果」等々、全ては仏道修行の兄弟子、または兄弟弟子としての叱咤激励である。

## 12 まとめ

古代から「癩」差別と宗教の教義は深く関わっていた。日本では仏教と儒教である。原典の厳密な注釈が必要である。その意味において勸進帳全体で三回も「癩人」という記述がある1440年・室町時代の「備前国西大寺勸進帳におけるハンセン病について」の考察をたたき台として、その後の教説の歴史的展開を追跡してもらいたい。

## 12 おわりに

この勸進帳が活字化されたのは、昭和22年・吉備文化研究会発行・限定100部の「備前西大寺文書」である。津下猛氏の斡旋で当時の鼓義算観音院住職が公開したものである。江戸時代の地誌や寺社奉行所の記録には公開されていない。この勸進帳にて備前西大寺中興の祖が「宥長」であることが公開された。私の調査研究にて備前西大寺と南都西大寺との江戸時代の交流記録が発見され、鎌倉・室町時代の備前西大寺は南都西大寺が直接支配する末寺であったことが証明された。

ご指導いただいた稲谷祐宣先生(備前長船 正通寺前住)、笹尾正道先生(真言律宗総本山 西大寺) 瀧下隆之先生(金沢市)に深く感謝したい。稲谷祐宣先生のご教示は研究手法である。「**仏典は読むものではない。毎日眺めていると見えてくるものである。**」この教示は稲谷仏教学の真髓の教えであると理解している。そして見えてきたのが三回登場するハンセン病の患者である。笹尾正道先生は真言律宗教学の第一人者である。勸進帳を眺めて一言のご指導もいただけなかった。「西大」を「南都西大寺」と解読するだけで参考文献は数多あり笹尾先生が指導するまでの内容では無いという事である。瀧下隆之先生は金沢在住の中世史の先生である。論文として発表できたのは瀧下隆之先生のご指導のおかげである。

### 13 参考文献

- ① 『ハンセン病排除・差別・隔離の歴史』 沖浦和光 徳永進編 2001年 榊岩波書店
- ② 『群書類従 巻第435 大安寺伽藍縁起流記資財帳』
- ③ 『朝日選書1010 中国古典選 易』 本田濟 1997年 朝日新聞社
- ④ 『鑑賞 中国の古典 第一巻 ① 易経』 三浦国雄 1988年 角川書店
- ⑤ 『新釈漢文大系23 易経上』 今井宇三郎 昭和62年 明治書店
- ⑥ 『易経の知識』 平木場泰義 平成9年 神宮館
- ⑦ 『密教の本 驚くべき秘儀修法の世界』 1992年 学習研究社
- ⑧ 『さいゆう「鹿児島我真言宗あれこれ」十七』 平成7年 大本山大覚寺
- ⑨ 『妙法蓮華経・巻第七』
- ⑩ 『仏典口座 七 法華経下』 藤井教公 1992年 大蔵出版
- ⑪ 『教行信証化身土巻 講義』 真宗大谷派大阪教化センター 平野 修
- ⑫ 『緯書の基礎的研究』 安居香山 中村璋八 昭和51年 株式会社図書刊行会
- ⑬ 『中国神秘思想の日本への展開』 安居香山 昭和58年 大正大学出版部
- ⑭ 『老荘思想を学ぶ人のために』 加地伸行 1997年 世界思想社
- ⑮ 『仏教動物散策』 中村元編 昭和63年 東京書籍
- ⑯ 『原始仏典を読む』 中村元 1985年 岩波書店
- ⑰ 『ブッタのことば』 中村元 1984年 岩波書店
- ⑱ 『日本の古寺美術10』 西大寺 昭和62年 保育社
- ⑲ 『備前西大寺文書』 昭和22年 吉備文化研究会

### 14 備前国西大寺勸進帳・縁起（原文は、和様漢文）

本寺の千手薩<sup>22517</sup>（千手観音）は、防州久河庄庄司の妻、皆足（人名）は藤氏。つとに志、薰発し、千手大士（千手観音）の像を肖安せんと欲すること、年久し。念（思い）を懇ろにし、感じる所、一日、〇〇童（わらべ）来る。仏工と号して彫創するなり。去るに臨み、藤氏、其の居を問う。工（たくみ）笑いて曰く。長谷は、我が仮の郷（さと）なりと云々。これまさに天平勝宝三年二月八日なり。

藤氏、綵絵（彩絵）の素像を欲し、且つは長谷の尊者をねぎらう。船にて東す。時に庄司、備州の主簿に任じ、府第に在り。藤氏、府を過ぎて金岡の浦に於いて船泊まる。数日留まり、解纜し（とも綱を解き）、まさに出船せんとするも、黏（粘）りて動かず。

藤氏、警（いましめ）を悟り、像を船に出し、岸上に著（着）す。而して後、船、洋々然るなり。獲（得）ずをあきらめる。そこで匠氏を召し、船膠の地をはかり、草（堂）一字をもって大士（観音菩薩像）を奉る。寺記の辞を略摘するのみ。

天平勝宝三年より、今、七百有余の歳、この邦の民人、何ぞその幸や。

普門の撰化は広く深し。奚ぞ（何ぞ）去る歳己未、孟秋（七月）初めの八（日）甲寅、鄙夫有り、来たりても空々（そらぞら）の如しなり。

沙門宥長に語りて曰く、今月初めの三（日）己酉の夜、夢に癩人、数輩来たりて云う。

我はこれ、西大の使令なり。（または、西大の使いせしむるなり。）汝、我が殿宇を、瓦葺をもってすべきなり。某、せまりて曰く、鄙賤の身、非力の及ぶ所、即ち、孔方四百字（錢四百文）を授けると曰す。是をもって宥長法師に与えれば、すなわち成功すべきなり。

覚めて後、他事により、鶏鳴過ぎ、西大之門の外、夢に記す事、大士（観音菩薩像）に詣ろうと欲し、忽ち二王堂において、阿堵物（錢）を拾得す。某、黙りてこれを秘す。同六日壬子、夜、また夢に癩人来たりて、激しく怒りて曰く、汝、何ぞ命に違うか、と。某、戦慄（おののき）て諾（うべな）い、覚めてなほ冷や汗、背をうるおす。この故に、あい

施すと。言いおわりて去る。鄙夫の夢、妄誕に渉るに似るといへども、孔方（錢）の驗（しるし）、また猶予なきか。諸大士（諸菩薩）、夢をもって人に示すは、古今に異ならず。いわんやまた、宝龜八年、安隆上人は来たりて云う、夢に長谷施無畏薩（觀音菩薩）、我に告げて云う。上人は、まさに備の西大堂の基を改めるべし。ゆえにこの地の耳を持ち来り、即ち、堂を今の地に移す。児嶋南浦、椎戸の海中より、犀角を得、これを埋める。けだし、竜識に随うなり。因って犀戴と号す。或いは曰く、今、云う西大は、隱岐院御製の筆のみに改める。それ、人間ことごと夢幻ならずは無し。莊周の胡蝶か、胡蝶の莊周か。もし然らば、鄙夫の夢、間然すべからずなり。殊に癩人現われれば、ああ、また怪しむべきなり。諸聖の方便、この格（のり）、もっとも多し。但し、薩（菩薩）の深旨、測りがたくて得るべからず。是に於いて、宥長、十方の檀門を仰ぎたたき、大士の嚴命に随わんと欲するなり。伏して願うは、上にては明主・重臣、中にては文武百官、下にては士農工商、豊儉、分に随いて、樂を施す。則（しか）れば即ち、瓦溝を見、然るに依りて、億万年の居を歴（へ）て、諸弘誓広大にて十方界の化度、然れば則（すなわ）ち、人々唯（ただ）福田（ふくでん）中に大善根を植えるに非ず。箇々（おのおの）、直（じか）に思修の三摩地（さんまち）を入聞（にゅうもん）するものなり。疏（法華義疏？）に曰く、西大地は普門勝絶の境（さかい・境地）を靈示す。一夢、薩（菩薩）の慈悲の深さ、彰（あきら）かに有るを希（こいねが）う。それ、日月の蹉（つまづき）、大厦を癩壊に及ばんと欲するを奈（いかんとす）。四（方の）軒（のき）、碧瓦の輪奐（偉大な建物）を見るを要（もと）めるは、須（すべからく）十方、青銅の英檀を憑（たの）み、童子…

備前國西大寺勸進帳なる。

一七六 備前國西大寺勸進帳 西大寺  
文書

本寺千手薩埵者、防州久河庄庄司妻皆足藤氏、夙志薰英、欲肖安千手大士像年久矣、懇念所感、一月□□童來、号仏工而彫削焉、臨去、藤氏問其居、工笑曰、長谷者我飯郷也云々、其当天平勝宝三年二月八日也、藤氏欲綵繪素像且備長谷尊者、船而東矣、時庄司任備州主簿在府第、藤氏泊船於金尚浦而過府、留數日、解纜將出船、黏而不動、藤氏警悟、出像於船、著于岸上、而後船洋々然也、不獲已、乃召匠氏、規船膠之地、草一字、以奉大士焉、時猶寺記  
之詳而已□天平勝宝三年至今七百有餘歲、此邦民人何其幸乎、普門攝化広矣深矣、(太平勝宝三年)梁去歲己未孟種初八甲寅有鄙夫來而空々如也、語沙門有長曰、今月初三日(夜)夢顯人數輩來云、我是西大之使令也、故可以瓦葺我殿宇也、某色曰、鄙賤之身非力之所及、即授孔方四百字曰、以是與有長法師則可成功也、覺後、因他事、鷄鳴過西大之門外、記夢事、欲詣大寺、忽於二王堂、拾得阿堵

室町時代

物如夢、某然而秘之、同六日子夜又夢顯人來而激怒曰、汝何違命乎、某戰慄而語、覺猶冷汗浹背、是故相施、言畢而去、鄙夫之夢、雖似涉妄誕、孔方之驗、又無猶子歟、諸大士以夢示人、古今不異、況又宝龜八年、安隆上人者來云、夢長谷施無畏薩埵告我云、上人當改備之西大堂基、故持來此地耳、即移置於今地、從兒嶋南浦推尸海中得單角、埋之、蓋隨龍隱也、因号單戴、或曰、今云西大者、改于觀岐院御製之筆而已、夫人間事々無不夢幻、莊周胡蝶々々莊周、若然者、鄙夫之夢、不可間然也、殊現顯人者、吁亦可怪焉、

諸聖方便、此格尤多、但薩埵之深旨、不可得而測度、於是宥長仰扣十方之檀門、欲隨大士之嚴命也、伏願

上而明主重臣、中而文武諸官、下而士農工商、農險隨分而乘施、則即見瓦溝依然而歷億万年之居、諸弘誓広大而成十方界之化度、然則人々非唯植大善根于福田中、箇々直入聞思修之三摩地者也、疏曰、西大地靈示普門勝絶之境、一夢希有彰薩埵慈悲之深、其奈日月懸空、欲及大厦瓌瓌、要見四齋輪奐之碧瓦、須憑十方英檀之青銅、童子聚沙猶成菩提

嘉吉元年(1441)

果、信心破靈蓋登妙覺場、豈云小補哉、諸君皆勉旃、

永享電集(十二卷)中五夏日

幹縁沙門有長敬白

證明 親自在菩薩

〔奥書〕  
〔奇進〕

一 緣起 一 勸進帳 一 判形繪共

丁卯年卯月下旬 備州兒嶋小串浦 文殊院 快尊〔花押〕

△岡山県古文書集三△